

佐伯鶴城新聞

since 1911

第17号

編集所 立城校
 分館 大分高等
 編集責任者 香村野

第38回 県総文祭まであと6日

佐伯に興味を持って欲しい

12年ぶりに佐伯で開催

地元校の協力に感謝

県総文祭の準備が進む中、事務局長の兒玉先生、大会テーマ・シンボルマークを考えた清藤さんと田島さんに取材を行った。兒玉先生はポスターについて「地元の高校生や先生方の協力で良いものが出来た」と語った。

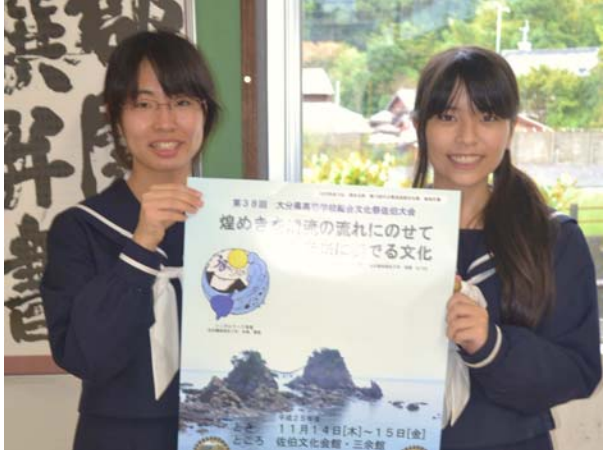
いよいよ開催が近づいてきた、第38回大分県高等学校総合文化祭佐伯大会。佐伯文化会館と三余館を会場に、十一月十四・十五日に行われる。そこで、大会事務局・事務局長の兒玉辰彦先生(英語科)に取材を行った。

現在、先生は出演者や地元を生徒・先生、来賓の方々と最終的な調整をされている。今大会のポスターを見て「今年大会のポスターは、最後に「十二年ぶりの佐伯市での開催。同じ高校生で大分一、九州一、日本一をとった文化系の生徒の発表を見る事ができる。佐伯の高校生にとっては、大きな経験になる。地区の方々にも、県内の高校生が文化活動に真剣に取り組み、活躍していることを知ってほしい」と語った。

(記事・佐藤 千晶)



ただいま最終調整中(兒玉先生)



佐伯に興味を持ってほしい

勢いのある大会に期待

清藤さん・田島さんが最優秀賞

県総文祭の大会テーマとシンボルマークはどちらも本校生が考えたものだ。大会テーマを考えた清藤なつみさん(三一五・写真右)は「大会開催地が佐伯。テーマには、番匠川など佐伯のことを感じてほしい」という思いを込めた。清流の流れのように高校生らしい勢いを出してほしい」と大会への思いを語った。

また、佐伯の文化活動について「今大会をきっかけに、佐伯で文化活動の発表の場

「大分市全体を明るく」活性化計画に不満の声

高文連新聞専門部が十一月二日に第二十四回新聞研究大会を実施した。私たちは前期広報委員と共に三つの班に分かれて出場した。今大会では「未来」をテーマに各校が記事を書き、それを競った。

そこで、今大会で最優秀賞を受賞した本校A班の工藤小春さん(二一三)と高瀬彩見さん(二一五)の記事を掲載する。

現在、大分市では「大きく変化するまちづくり経営スキームによるまちづくり戦略の構築」をコンセプトに市の活性化を計る「大分市中心街活性化基本計画」の第二期が実行中である。

そこで、大分市在住の方に「大分市が活性化されていると感じているか」を街頭取材で調査した。

駅周辺で働いている女性(32)は「特に変化は見られない。駅などでイベントをするのは良いが、交通や環境の整備を優先すべきだ。また、工事が長引いているせいか、自転車の不法駐輪が増えており、困っている」と、計画の方針に不満を抱いている。

タクシー運転手の男性(70)は「活性化されているとは思えない。駅の方は」と感じる。駅の方は

「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。

「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。

「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。

かりに人が流れてしまいい、商店街の方は寂しいままだ」と、全体が活性化されていないことを指摘した。

商店街で働いている女性(36)は「若者が働ける場所が少なく、市の人口自体に変化は見られない」と話した。

このように、多くの人が活性化されているとは思えないと話す。その主な原因としては、交通整備の不十分な点や、工事による環境の悪化。また、市の一部分しか活性化されていない等があげられた。

この活性化計画には、まだ改善すべき点が多くみられた。今後の活性化計画には、もっと市民の意見を取り入れて欲しい。

(記事・工藤 小春)

「追分」は「活性化されているとは思えない。駅の方は」と感じる。駅の方は

「追分」グランプリ受賞

津波をモチーフに描く

SOJOビエンナーレに『追分』を出品してグランプリを受賞した清藤なつみさん(三一五)。

グランプリという結果については「自分の中で受賞するのが難しい賞だし、自分の絵が人に認められたことは自分にとって意味のあることだ」と話した。

製作中に苦労したことは「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。

「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。

「まだ記憶に新しい東日本大震災の時の津波が、自分の街を襲った時に自分はどう行動すればよいかを、見た人に考えて欲しい」と話した。



津波が街に迫る

夏は暑さがじりじりと続き、なかなか涼しくならなかったが、最近では風も冷たく、冬へと近づいていると感じる▼夏の間には早く冬になってほしい、冬の間には夏になって欲しいと言っているのをよく聞くが、春と秋は除いて夏か冬のどちらが好きかと聞かれると、どちらだとも答えるだろうか。私は断然冬の方が好きだと答える▼その理由はいくつかある。一番の理由として、寒さは着込めばだんだん暖かくなり、なんとか乗り切ることが出来るが、暑さはそうはいかない、ということがあって、薄着をしても、うちわで扇いでも暑さに耐えられない時は、扇風機やエアコンなどの電化製品にどうしても頼りがちになってしまう▼つまり、当たり前だが、夏は他の季節よりも電気が代りにかかっている。その点、冬の寒さはお風呂、コタツ、毛布などで暖かくなることが出来る。休みの日には、できることならば、時間を気にすることなく布団に入りたい。寒さの中で得られる暖かさには、何ともいえない手放し難さがあると思う。その気持ちは、寒さに比例してますます強くなり、二度寝などという事態も起こってしまう▼だが身もふたもなく言うと、外に出ると過ごしにくい夏や冬よりも、どこにいても過ごしやすい温度の春や秋のほうが結局好きだと感じる。

夏は暑さがじりじりと続き、なかなか涼しくならなかったが、最近では風も冷たく、冬へと近づいていると感じる▼夏の間には早く冬になってほしい、冬の間には夏になって欲しいと言っているのをよく聞くが、春と秋は除いて夏か冬のどちらが好きかと聞かれると、どちらだとも答えるだろうか。私は断然冬の方が好きだと答える▼その理由はいくつかある。一番の理由として、寒さは着込めばだんだん暖かくなり、なんとか乗り切ることが出来るが、暑さはそうはいかない、ということがあって、薄着をしても、うちわで扇いでも暑さに耐えられない時は、扇風機やエアコンなどの電化製品にどうしても頼りがちになってしまう▼つまり、当たり前だが、夏は他の季節よりも電気が代りにかかっている。その点、冬の寒さはお風呂、コタツ、毛布などで暖かくなることが出来る。休みの日には、できることならば、時間を気にすることなく布団に入りたい。寒さの中で得られる暖かさには、何ともいえない手放し難さがあると思う。その気持ちは、寒さに比例してますます強くなり、二度寝などという事態も起こってしまう▼だが身もふたもなく言うと、外に出ると過ごしにくい夏や冬よりも、どこにいても過ごしやすい温度の春や秋のほうが結局好きだと感じる。

作品について「良かった点は水が下から上に迫る感じが表現できた。他にも街の様子を素材で工夫できていた。反省点は家と家の隙間を線などでごまかしたところ。それに、佐伯の港により近くできたらもっと良かった」と語った。

(記事・松下 秀之)